



MAMAGOTO NEWSPAPER ままごと新聞

発行元：ままごと MAY 16, 2015 NO.13

『わが星』 未就学児観劇可 公演を終えて

端田新菜×加藤仲葉

『わが星』5月29・30日の2回は、未就学児観劇可の公演だった。ゼロ歳児から入場できる公演ということで、企画者の端田新菜と、実働隊長の制作・加藤仲葉が、公演実現までの道のりと当日を振り返る。



端田 乳幼児と保護者が一緒に観られる演劇を、ついでにいうのは、もともと私が今やりたいことの中でかなりプライオリティーが高いことでした。それには『わが星』がいんじやないかと思っていたんです。再々演で俳優さんとスタッフさんのチームワークができて、常に一定のリズムの中で展開され繰り返しのフレーズも多いし、エログロがなく子どもが主人公だから、子ども向きなのではないかなと。

加藤 という話を聞いて、大変さを超える前に面白い！と思っていました(笑)。

端田 でも企画を進めるうちに、なんとなくスタッフさんたちが困っている感じがして、で、青年団で子どもための作品の制作をしている友人に相談したら、「それは誰に舞台を観せたいかがはっきりしてないからだよ」と指摘されて、なるほど！と。で、考えた結果、私はまずお母さんに、子どもと一緒に『わが星』を観てほしいんだと気がきました。というのも私自身、子どもが9カ月の時に一緒にToys Mansionの公演を観たんですね。1時間くらいのパフォーマンス中、子どもがすぐくちゅんくちゅん観てる時間があった、私が面白いって思ってるものと一緒に楽しめたのがすごくうれしかった。

その経験が、今回の企画のきっかけだったんです。そこがはっきりしたら後はわりと早くて、具体的なことをどんどん決めました。子ども向け公演の実績があるうりん劇場さんにも相談して、立つてあやせるスペースがあるという聞いて立ち見席を増やしたり……。

加藤 あと段差がある所にはへりに段ボールでカバーをつけたり、客席と舞台面の境をテープで区切ったりしましたね。限られた予算の中、いつも以上に想像力を使って、何ができるかを考えた気がします。

端田 それと、演劇を仕事にしている友人に子連れで稽古見学をしてもらいました。なかちゃん(加藤)は、そこで感じたことをルールとしてどんな決めていくてくれました。例えばスタッフが子どもの相手をしてしまうと、親子と一緒に観るという目的から離れてしまう。だからあまり子ども

を構わないようにしよう、とか。演出面では、柴があまり変えないという方針をまず立てたので大きな変更はありませんでした。ただ、暗転でも客席を少し明るくすること、あとストロボをたくのを止めたり、自転車を使うシーンを最小限にしたり、ということとありましたね。

加藤 多少変わったシーンでも、スタッフさんが。どうしたらより良くなるか、を考えてくれて、ビックパンのシーンなんて特に、すごくかっこよくなりましたよ！

端田 公演初日は、演じててもお客さんが楽しんでくれるのかどうか、正直確信が持てなかったです。作品は最後までいったし、精度が落ちたシーンは一つもなかったはずなんですけど、どうだったんだろう、と。加藤 私は普段の何十倍も疲れました(笑)。

10名のお客さまに対して場内スタッフが1名くらいの比率で配置したんですけど、14時公演に備えて10時から打合せして、いろいろシミュレーションしてみたり……。ただ、想定外のことはいくらも起きなかったように思います。まあ、楽しくてずっと声を上げちゃう子がいて、泣くばかりじゃないんだなあとといった発見はありましたが(笑)。

端田 作品を選ぶとは思っているので、今後ままたごとの全公演で乳幼児入場可の公演をと

NEXT

- KUNIO12「TATAMI」
- ◆柴幸男【脚本】、大石将弘【出演】
- ◎KAT 神奈川芸術劇場大スタジオ
- 2015年8月22日(土)・30日(日)
- 多摩1キロフェス 水上ステージ公演
- ままごと×バルテノン多摩
- ◆あたらしい憲法のはなし
- ◆柴幸男【作・演出】、宮永珠生【制作】
- 加藤仲葉【演出助手】
- ◎バルテノン多摩きらめきの池 水上ステージ
- 2015年9月19日(土)・20日(日)
- 多摩1キロフェス
- ◆スウィッチ総研「多摩1キロフェススウィッチ」
- ◆大石将弘【研究開発・出演】、柴幸男【研究開発】
- ◎多摩1キロフェスエリア各所
- 2015年9月19日(土)・20日(日)

- おおさかカンヴァース2015 たたかう芸術祭
- ◆スウィッチ総研「道頓堀スウィッチ」
- ◆大石将弘・柴幸男【研究開発】
- ◎道頓堀周辺
- 2015年10月16日(金)・17日(土)
- ネオンホールプロデュース「四つの和音でセブンス・コード(仮)」
- ◆柴幸男【作・演出】
- ◎長野・ネオンホール
- 2015年10月29日(木)・11月1日(土)
- 編集後記 今月は『わが星』再々演に焦点を当て、小豆島公演や乳幼児入場可公演のことなど、さまざまな角度から公演を振り返りました。冒頭の柴さんのコラムにもある通り、『わが星』初演・再演・再々演を通じて、本当にたくさんのお会いがありました。『わが星』を応援してくださったすべての方に、この新聞が届きますように！(熊井)



「細やかな気配りとあたたかな思いやりが劇場にあふれていて大感激。親子で一緒に演劇を観る。このことを大事に思っていることが伝わりました。この『わが星』を娘と夫と体験できたことは忘れない宝物です」高橋ゆうこさん [toi] と1歳のお嬢さん

「子どもにも観せてやりたいと思い、妻と5歳の長女の3人で観劇。驚いたのは、スタッフの多さ、かゆいところまで行き届いた環境、丁寧な説明。親にも子どもにも安心して楽しめる環境だったことが印象的でした」永瀬元太郎さんと5歳のお嬢さん

夜空に輝く『わが星』を いま振り返り観測する

柴幸男

「わが星」東京公演と小豆島公演、どちらも無事終了しました。合わせて9000名ほどのお客さまにご来場いただきました。ありがとうございます。ありがたうございました。正直に言って、とても驚いています。まさかこれほど多くの方に観てもらえるとは思っていませんでした。作品に賛否はもちろんありますがこれだけの人が行動してくれたことは、今回の公演の成果だと素直に受け取っています。

東京で一カ月のロングラン公演は挑戦でした。実を言うと、公演数を減らす交渉を劇場側としたこともあります。劇団の収入が減るにもかわりなく、それだけ劇団にプレッシャーがかかっていました。あの時、現実に近い予測を立ててきたのは、その数字をふっかけてきた(とあえて書きますが)三鷹市芸術文化振興財団の森元さんだけだったと思います。森元さんには公演が終わってすぐに感謝と謝罪をしました。

おそらく、ままごとが一度にこれだけのお客さまに観てもらえる機会はないでしょう。数年前から、ままごとは、動員人数を増やしていくことを目

指さなくなりました。また、単価1チケット代、を高くすることはもつと目指さなくなりました。じゃあ一体これからどうやって劇団活動を続けていくのかと言うと、僕たちは常にそれについて考えていて、それを考えることが今、最も楽しいとも言えます。

小豆島での公演はその一例になるかもしれませんが。実際にこ来場いただいた方以上の影響を島に、そのほかの地域にお伝えできた感触があります。小豆島公演のお客さまの反応は『わが星』初演時のように、不思議な熱狂を帯びていたように思います。3年かけた成果が3日間の90分に集約され、花火のように打ち上がりました。それは『わが星』という作品の花火のようであり、また「演劇」そのものの花火のようでもあり、どちらにしても気持ちの良い光が瞬いていました。

以前は更なる新作で『わが星』を凌駕したいともがいていましたが、今思うのは、この作品は偶然生まれた奇跡のような存在で、もうそれはそれでいいのではないかと、ということなんです。『わが星』は僕のものではなく、僕が超えるためにあるものでもない。それはほかの作品も、そのほかの活動も、すべてそうです。作家であるなら大切なのは未開の土地を進むこと、未来の土地を進むことです。後ろを向きながら前を歩くことは難しい。『わが星』は僕たちの前にはありません。たまに振り返るのも悪く

ないですし、前方に新しい『わが星』を見つげるのも良いかもしれません。それはまた、その時に考えることにしましょう。

『わが星』最後の景色は、クチロ口のライブでした。小豆島高校の吹奏楽部が演奏した音源をサンプリングしてつくられた新しく懐かしい「00:00:00」。クチロ口はいつもどおり、少し無愛想で、やっぱりエモい、最良のパフォーマンスをしてくれました。

あらためて、みなさま、本当にありがとうございました。

『わが星』小豆島に舞い降りた

神戸港から一日2便のフェリーに揺られること3時間。ヤノベケンジ作の、灯台に想を得たオプジェ・スターアンガーが強い光を放つ小豆島・坂手港は、7月の3連休を楽しもうという多くの観光客でにぎわっていた。

『わが星』小豆島公演の会場である香川県立小豆島高校は、近年ままごとが活動拠点としている坂手港から車で約20分、病院や町役場が並ぶ草壁地区の、海から少し陸へ入ったところにある。全校生徒は約300名。島にただ二つしかない高校のうちの一つで、再来年に土庄高校との統合が決まっている。残念ながら演劇部はないが、陸上部



2015年の『わが星』衣裳スケッチです。

音の響き方の違いだった。体育館だけに天井が高く、また壁や窓に紗幕を貼っているせいか、東京の劇場で観た時に比べると音が広がらず吸収されてしまったり、逆にキャストが動きながら歌い始めるや残響が気になったりして、冒頭シーンがこれまでと少し違う印象だったのだ。さらに「リズムに乗ったのはやいせりふは、あのおばあさんたちの耳にちゃんと届くのかしら……」と余計な心配がよぎったりして、勝手にドキドキすること数分。

しかし、そんなことはすぐに忘れてしまった。というのも、コミカルな家族のやりとりにはちゃんと大きな笑い声が出ていたし、子どもたちはビートに合わせて身を揺らしながら、舞台をじっと見つめていたのだ。さらに、俳優たちが生み出す熱気の輪が、舞台から客席にぐ

やバレーボール部、サッカー部、バドミントン部、弓道部など、部活も盛んで、実際、高校を訪れると、よく日に焼けたジャージ姿の学生さんたちが、男女問わず「こんにちはー」と挨拶してくれたのが印象的だった。

正門から入って広い校庭をぐるりと回ったところに、『わが星』が上演される旧体育館があった。普段卓球部が練習に使っている場所だそうで、天井が高く明るい色の新体育館に比べると、どっしりとした旧体育館のコンクリートの壁は歴史を感じさせる。

その入り口に、島ではおなじみの、「ままごと」と書かれた旗が掲げられていた。開場の2



2015年の『わが星』衣裳スケッチです。衣裳担当の藤谷香子さんが描いてくれました。



2015年の『わが星』衣裳スケッチです。

んぐん広がり、客席と舞台の境界が徐々に溶けていくのを肌で感じられた。ただ、小豆島だからといって特別な演出は何もない。スタッフとキャストはこれまで通り、星の一生を全力でつづけていった。

ラスト、ちいちゃんの「おやすみなさい」と共に、闇。再び明かりが点いた時、対岸の客席には満面の笑みの子どもと、ハンカチを目元にあてる若い女性と、肩を寄せ合うカップルが見えた。同じものを観たはずなのに、それぞれの顔、顔。『わが星』では何度も観て来た光景だが、小豆島でも同じ光景に出くわした。

観劇の余韻が冷めぬまま会場を出ると、空には満点の星が！一瞬、現実と劇世界が混じり合い、ええと、この星はいつ見た星なんだっけ……？と自分ごとどこにいるのか分からなく

時間前に着いてしまったので辺りをうろろろ散歩していると、ちょうど休憩時間になったのか、俳優さんたちがお弁当を手には、そろそろと外へ出て来た。リラックスした雰囲気です。それぞれの時間が過ぎる彼ら。その頭上には、碧から薄紫へ、刻一刻と色を変える大きな空が広がっていた。その紫が少しずつ濃くなるにつれて、会場を訪れる観客が、一人また一人と増え、大きな人の輪ができていった。

開演30分前になると、受付に置かれた球体のランプが点灯し、開場。「柴さんが去年島に来た時にね……」「お芝居って観たことなくて……」そんな会話を交わしながら、ロマンスグ



2015年の『わが星』衣裳スケッチです。衣裳担当の藤谷香子さんが描いてくれました。



2015年の『わが星』衣裳スケッチです。

なりながら、そのまましばらく空を見上げていた。これは小豆島ならではの、最高にぜいたくなエンディングだ。

◆ 6年前に生まれた『わが星』は、東京から、三重・名古屋・北九州・伊丹・いわきを旅して、遂に小豆島にたどり着いた。初演から再々演までの6年間、東京から小豆島までの約5000キロ。その距離は確かに遠いが、でも星から見ればほんの一瞬、ごくわずかな距離とも言える。近年ままごとが目指しているのは、そんな時間や距離の感じ方の、単位を、自分たちで決める、自分たちで変える、ということなのかもしれない。

今度はいつ、どこで『わが星』に出会えるだろう。でもどこに行っても空は頭上に大きく広がり、そこには無数の星がいつでも瞬いているはずだ。

レーの女性のグループや浴衣姿の子どもを連れた家族、また島外から来たらしい若いカップルなどなど、チケットを手にした人たちが続々と体育館の中へと入っていく。その列に付いて客席に座ると、そこはもう、『わが星』の空間だった。何も無い円形の舞台をぐるりと囲む客席、仄かな明かりを放つ、ぼつてりした形の裸電球、その向こうにぼんやりと見える対岸の観客……。そんな、劇場。然とした雰囲気な観客の空気を和らげたのが、柴の登場だった。

柴は、会場中のBGMが、今年4月に行ったワークショップから誕生した「いろんな時間」



2015年の『わが星』衣裳スケッチです。衣裳担当の藤谷香子さんが描いてくれました。

「ままごとと小豆島」

小豆島町長・塩田幸雄

劇団ままごとの『わが星』の公演が、小豆島で、しかも小豆島高校の旧体育館で行われました。夢を見た気持ちです。

昨年、柴さんたちから、小豆島で公演をしたいという話を聞いたとき、ありがたいけど、ハードルが高くて難しい、でもやってみようと思いました。

「ままごと」の皆さんにお会いしたのは、瀬戸内国際芸術祭2013のときがはじめてでした。

小豆島の坂手港の路地で行った「港の劇場」での自然なパフォーマンスを見ながら、演劇やアートは、もしかしたら、小豆島が元気になるきっかけをつくってくれるかもしれないと感じました。

小豆島での公演の意味は、そこが、東京のような都会ではなく、人口減少に苦しむ小さな町、島で行われたこと、統合により間もなく役割を失う小豆島高校旧体育館で行われたこと、そして「今」行われたことにあると思います。

「今」公演される意味は、「今」が先が見えないからでなく、ぼんやりながらも目指すべきものが見え始めようとしている「今」だからだと、私は思います。

劇のなかのせりふのなかに、そのヒントがあります。

「……手つないでもいい？」

「ちーちゃん、あのとき声を

かけてくれてありがとう」

「ずっと見てたから」

「ずっと見てたんだ」

「100億年、ずっと見てたから」

「ずっと見ててくれたんだ」

小豆島高校の校舎は、再来年4月に新しい高校となり、姿を消します。でも、それは終わりではなく、そこから新しい何かが始まる気がします。それが何なのか、まだ分からないのですが、そんな可能性を今度の公演はつくってくれたと思います。